やさしい福音

（これからの日本宣教の為に）

２０１６年１１月３０日

西九州伝道所　佐々木正明

はじめに

これからの日本の宣教の為に、絶対にしなければならないことがいくつかあります。そのうちの一つが、信徒の活躍の場を広くすることです。日本中を見渡せば、牧師の数がどんどん少なくなって、多くの教会が弱りきっているからです。もはや、一人の牧師が一つの教会を世話し、一つの教会が一人の牧師家族を養うことが、できなくなっています。理由はともかくそれが現実です。これからしばらくはそのような流れが続き、信徒の数もかなり少なくなることでしょう。（日本の宗教の衰退はキリスト教だけに限りません。日本全土で、もうすぐ住職がいなくなるお寺が３千以上あると言われ、多くの神社が、世話をする人がいないために朽ち果ててしまうそうです。）

やっと信徒の出番になりました。信徒の活躍こそ、聖書に記されている教会のもともとの姿、本来のあり方なのです。「使徒の働き」が書かれたころのように、たくさんの信徒が活躍すれば、神学校などで専門の学問を積んだ牧師や伝道者は、ごくわずかいるだけでよくなるのです。信徒が活躍し、福音を語り教会の設立の大きな力となるためには、福音伝道と教会の指導を、誰にでもできるやさしい働きとしなければなりません。

多くの信徒たちは高度な神学教育を受けた牧師の、専門的で深い説教を聞いて感銘を受け、感動を楽しむことができるようになった一方、自分が聖書の教えを語り、未信者を救いに導くなど、到底思いもよらないほど、高度で困難なことだと思い込むようになったのです。それが、教会の停滞と衰退の原因です。一般の信徒にとって、伝道することはとても、とても、非常に、ものすごく難しい仕事です。だからこそ、福音宣教がますます困難になりつつある今、福音宣教と教会の指導の働きを、もともとのやさしさに戻し、信徒の働き人をたくさん起こすのが、絶対に、しかも緊急に必要なことなのです。そうなってこそ多くの人々が救われ、たくさんの教会が建て上げられていくのです。

そこで何としても必要になるのは、福音をもっともっと分かりやすく整え、だれにもでも覚えることができ、かんたんに説明できるようにすることです。普通の信徒がなんの困難も

感じることがなく、ごく当たり前のこととして、レストランで食事を注文するくらいの気軽さで、福音の大切な部分を説明できるようにしてあげるのです。そこから始めなければ、これからの日本では救われる人がいよいよ少なくなり、キリストのみ体である教会も、構成員である信徒の数も、減少の一途をたどることになるからです。聖霊は、信徒が語る単純な福音を通して人々を救いに導き、教会を誕生させ、成長させてくださるお方です。それが使徒の働きに見る、人々の救いと教会の成長のようすです。

使徒の働きの時代、伝道も教会の指導も、ほとんどが信徒の働きでした。信徒にもできる働きだったのです。また信徒たちはそのような働きができることに感動し、誰に勧められなくても喜んでそのようにしたのです。当時の世界ではたいていの都市にはユダヤ人の会堂があり、どこでも、ユダヤ人の信じていた天地創造の神についてある程度知っていた者、あるいはその信仰が優れていると知っていた者たちが、多数生活していました。そのような人々に、日常生活の中のおしゃべりを通しながら、キリストの福音へとつなげて行くことは、案外やさしかったと思われます。

でも、現在の日本はまったく状況が違います。日本にはユダヤ人は数えるほどしかおらず、彼らの信仰については知られていません。普通の日本人は旧約聖書も新約聖書も知りません。キリスト教はまったくの弱小宗教です。伝統的キリスト教国の人々とは、宗教意識も神についての理解も感覚も異なっています。そのために日本人を対象として、キリストの福音を理解しやすく、語りやすく、受け入れやすくする必要があるのです。ただしそれは自分勝手にキリストの教えを変えて、日本人に都合よくするのではなく、あくまでも、キリスト教が誤りのない神の言葉として信頼している、聖書に教えを忠実に学ぶことによって行うのです。

このテキストの用い方

このテキストの「本文」は、とても易しく、しかも短くまとめてあります。まず、少し「基礎的教え」だけを読み進み、全体を把握してください。この部分をしっかりと覚えて、利用してくだされればそれで充分だと思います。

もっと説明がほしいと思われる場合は、基礎的教えの後に続いて、「説明」の部分にお進みください。基礎的教えに沿って説明が加えられています。

基礎的教え（1）

「私もおんなじ」から始める

日本人であるならば、たいてい、他人（ひと）と同じであることを好み、同じであることに安心します。反対に、他人とは違っていると何となく不安で、居心地が悪いものです。四方を荒海で囲まれ、他国からの干渉は最小限で、定着性の高い稲作文化を持ち、小さな居住地に一生しばりつけられて来た日本人は、昔から、隣近所に気遣いながら生きてきたのです。良かろうと悪かろうと、「他人と同じように」というのが平均的日本人の感覚です。ですから日本人に福音を語るときは、「おんなじ」から始めましょう。証から始めるのも、「私もおんなじだったのですよ」という、同感、同調、同情によって警戒感を持たせず、安心して聞いてもらうためです。

「私は普通の日本人ではなく、数少ないクリスチャンです。」「あなたとは違う神を信じています。」「あなたとは考え方も生き方も違います。」「私は違う国から来た、外国の宗教を信じています。」「私は進んだ西欧文化の神を拝んでいます。」「私の神様が本当の神様だと思います。」「私の生活のほうが勝れていると思います。」私たちが普段から心掛けている、「証ができる立派なクリスチャン」になると、ついついそういう言い方になってしまいがちです。立派なクリスチャンになってしまってはいけません。それでは、話を聞いてもらえません。

そこまでは行かないとしても、立派なクリスチャンになってしまうと、普通の日本人とは付き合うことができない、浮世離れした人間となって、証も伝道も困難になってしまいます。初めから、「奴は普通の人間じゃないよ、」「あいつは変わりもんだよ、」「奴は俺たちとは違うのさ」と言われて、心の壁が作られてしまうのです。ですから、立派なクリスチャンが多い立派な教会には、新しいクリスチャンはなかなか生まれてこないのです。

そうではなく、「私も日本人のひとりとして、他の多くの方々と同じように生きてきました」と始めて、「普通の日本人の一人として、幼いころから親に連れられて、神社やお寺に

行っていました」と進むのです。「ですから、そういう環境にあって、普通の日本人とおなじように、心の中に、目には見えない『誰か』、あるいは『何か』を感じていたと思います。

　神様とは少し違うような、それでいて神様と言ってもいいような、良くわからないけれど、大きく、高く、優しいお方です。ときには、・・・うまくは説明できないのですが、このお方に命を授かり、生かしていただいているのだと感じ、そっと感謝したくなったこともありました。太陽を昇らせ、雨を降らせ、作物を実らせ、動物を育ててくださっているのだと、何となく、思ったことがありました。それは、そのように『理解した』というより、そのように『感じた』と言ったほうが良いものです。」そのように感じているから、ご飯を頂く時には、誰に言うとはなしに「いただきます」と言ってから、箸をつけるのです。

　と、まあ、こんなふうに始めて、「たぶん多くの日本人が、私と同じように感じてこられたのではないかと思います」とまとめると良いでしょう。それからもう一歩進んで、「今、私はクリスチャンと呼ばれていますが、私が信じ頼っているお方は、私が小さなころからずっと心で感じ、感謝してきたそのお方です。外国から持ち込まれた神様ではありません。ですからいま、何か、とても懐かしい気持ちで、このお方に信頼しています。そのお方を『神様』と呼べないこともありませんが、神様と呼ぶと、八百万の神々と間違えられてしまいますので、いまは、「このお方」とお呼びして、分けておきましょう。」

　それからもう一度、「自分はクリスチャンと呼ばれていますが、多くの日本人が昔から心に感じ、ひそかに感謝をし、崇めているそ気高いお方を拝んでいるだけで、他の日本の方々とさほど違っているとは思っていません。ただそのお方を、『私を造って下さったお方』である、『天と地をお造りになったお方』である、『私を愛し守っていて下さるお方』であるとはっきり認めて、崇めているだけです」とお話しします。

「そのようにはっきり認めてこのお方を信頼してから、私の生活は変わりました。別に、立派になったとか、苦しみがなくなったとかいうのではありません。でも毎日、いつでも、どこでも、頼ることができるお方を近くに感じて、安心して生活できるようになりました。これだけは、良かったと思っています」と証をし、「私は外国から持ち込まれた神様を信じているのではなく、もともと日本にいて、日本を祝福してくださっているお方、そして多くの日本人が、昔から心の奥で感じてきたお方を信頼しているのです」と、ダメ押しをしておけば充分です。

　「私は神など信じない」という人がいても、「いえ、神は存在します」などと争わないでください。かえって、「そうですか、実は私も神など信じていません」と、同調してください。「クリスチャンなのに『神は信じない』と言うのですか！？」と、驚かれることでしょ

う。それでいいのです。日本人が「神はいない」と言うときの「神」は、八百万の神々や神社に祀られている「神」であって、私たちクリスチャンが言う「神」とはまったく違うのですから、彼らの言う通り、神などいないのです。「神なんていない」と同調しながら、日本人が本能的に心の奥底で感じている、大きく、優しく、おくゆかしい「お方」、神ではない気高い存在について、話して行けば良いのです。

反対に「私は神を信じています」という人がいたら、「そうですか、わたしと同じですね。ところでその神は、どのような神様ですか？」とたずね、その人の答えの中に、クリスチャン信仰と共通するところを見つけ出すのが大切です。真面目に八百万の神々のことが出されたら、聖書にも「神々」という言い方が出てきて、天の使いや悪霊など、人間より少し力の強い者たちの呼び名になっている場合もあることを、お話したらよいでしょう。聖書の世界観も日本人の世界観も、同じようにアニミズムと呼ばれるものであって、いろいろな霊的な存在が、人間の住む世界に一緒に住んで活動していると考えられています。ですから、ある意味では多神論でありまた汎神論なのです。そこで、「私たちクリスチャンも、その点は同じなんです」と同意をしながら、その延長として、創造主を信頼すべき唯一のお方であると信じる、クリスチャンの信仰をお話しして行くのです。決して違いを指摘せずに、「同じ」を強調しながら行うのです。

基礎的教え（１）の説明

日本で福音を語る場合、最初に問題になることの一つが、「誰を信じるか」あるいは「何を信じるか」です。これを明確にしてあげることが最も大切です。日本人の宗教意識では、ここがいつも曖昧で、話が進まないからです。この場合気を付けるのは、相手に違和感を持たせないで、かえって、「私も同じだ」と感じさせることです。昔から集団生活、共同体伝生活を大切にし、仲良く暮らすことを最も大切だと考える日本人は、「同じ」であることに特別な意味、価値を感じ、同じだと感じると安心感と信頼感を持つのです。

「私も同じだ」と感じさせるのに、誤魔化しがあってはなりません。つまり口先だけではなく、私たちクリスチャン自身が、心の底から「同じだ」と信じていなければならないのです。この「同じだ」という感覚が、西欧から入って来たキリスト教には欠けています。「私たちの信仰は皆さんの信仰とは違います。」「皆

さんの神は私たちの神とは違います。」「皆さんの神は間違った神で、私たちの神こそ本当の神です」と言って入ってきて、しまいには、「本物の神だけを信じて偽物の神は捨てましょう」とやらかして、日本人の反感と嫌悪を買い、結局、拒絶されてしまったのです。これはまったく間違ったやり方であるだけではなく、日本人の信仰心を全然理解していないことの証拠であり、聖書の教えも正しく学んでいないという事実を、はっきり示すものです。

クリスチャンである西欧人もクリスチャンでない西欧人も、あるいはクリスチャンである日本人も、クリスチャンではない日本人も、聖書の基本的教えからすると、実は「同じ」なのです。こういうと、福音主義的なクリスチャンたちはすぐに、「私たちはみな罪人であるところが同じだ」と思うことでしょう。そして、私たちはいまや、救われて義とされた罪人だ。あなた達はまだ救われていない罪人だ」と言って、たちまち相違点に飛躍してしまうことでしょう。それは西欧で作られたキリスト教です。聖書が読めていないのです。日本人には、西欧キリスト教の言う「罪意識」などあまりないのですから、罪の話をしても、十字架の物語を伝えてもわかってもらえません。日本人に通じるのは「同じ」ということです。

では私たちクリスチャンと、クリスチャンではない日本人は、どこが同じなのでしょう。それは聖書に明らかに書かれていて、疑う余地もない事実です。聖書は私たちクリスチャンもクリスチャンでない人も、西洋人も東洋人も、ユダヤ人も異邦人も、どのような地位や立場にいる人も、人間と呼ばれるすべての生き物は、神ご自身によって、神の姿に似せて造られていると教えています。神によって造られたという事実と、神に似せて造られたという事実が、人種、民族、言語、文化、国家を超えて、あらゆる人間に共通なのです。（創世記 1 章 26～27 節） つまり人間として「同じ」なのです。

さらに、すべての民族が神の愛の対象であり、神の祝福の対象であり、神の救いの対象であるということも同じです。（創世記 12 章 3 節）すべての人間が神に似せて造られたものであり、神の愛の対象であるということは、ほとんどのクリスチャンが知っている聖書の教えです。大多数の西欧のキリスト教も、この事実を認めています。しかし大多数のクリスチャンは、これがどのような意味を持っているのかに気づいていません。西欧のキリスト教の多くは、これがどういう意義を持っているのか、特に、自分たちの文化圏以外に住む人々、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人々に、いかに重大な意義を持っているのか、深く考えたことがありません。理解していないのです。だからこそ、西欧キリス

ト教国の多くは、白人以外の人種、異文化、異教国を情け容赦なく侵略し、殺戮と搾取をくり返した歴史を持ち、1965 年に国連総会で人種差別撤廃が決議され、1969 年から発効しているはずなのに、今でもいたる所で差別が行われています。

日本人を含めてすべての人間は、神に似せて造られています。そこにはとても説明し切れない、深い意味があることでしょう。ただその中でも、神の基本的な性質が人間に与えられているということだけは、はっきりと、間違いなく言えるのです。人間は神に似せて造られているのです。すなわち、まず、霊的な本質です。あらゆる動物の中で人間だけが神を感じ、神と交わり神を礼拝したいという、本能的欲求を持つのはそのためです。我が家の猫は、もうそうとう長い年月、毎朝家内の長い祈りを聞きながら暮らしていますが、決して祈ろうとはしません。人間以外には、神に似た霊的性質を与えられてないために、神意識がないのです。ところが人間だけは、いつの時代でも、どこの民族でも必ず宗教を持っていました。神を感じ、神を想い、神を祀り、神に語り掛け、神を礼拝しようというのは、決して消え失せることのない、すべての人間に与えられている本能、「同じ」本能だからです。人間とほかの動物との本質的違いはここにあるのです。

それだけではありません。人間には神に似た聖さ、正しさ、公平さ、あるいは優しさ、思いやり、愛、そして共に痛む同情の心が与えられています。これらは誰に教えられなくても、人間が人間として共有している本能なのです。西欧キリスト教では、人間はみな罪人であり、神の怒りの対象であり、救われなければみな滅びると教えます。それこそがすべての人間の共通点だというのです。それが間違っているわけではありません。しかしそれ以前に、人間は神に似せて造られた本能を持っており、たとえ罪によってそれが捻じ曲げられたり、損なわれたりしているとしても、完全に破壊されてしまったとか、消失してしまったというわけではありません。少なくても聖書は、そのようには教えていません。人間は、自分の罪のために神の国（支配）から追放され、この世と呼ばれる悪魔の支配に陥って、悪戦苦闘しながらもなんとか社会を形成して生きています。ただ、たとえ生きていても、霊的には命の源である神から離れて死んでいるために、やがては肉体的にも霊的にも死んでしまう、滅びの運命に弄（もてあそ）ばれているのです。

ところが神は、そのような人間をなおも慈しみ、これを救おうとなさり、救い主を送る計画を立て、その救い主を迎えるにふさわしい民族を作ろうとなさいました。そこで白羽の矢が建てられたのが、イスラエル民族です。神はこのイス

ラエルに、啓示と言う形で特別にご自分を現し、救いの計画とイスラエル民族の歩むべき正しい道をお示しになりました。その啓示が記されたのが旧約聖書です。旧約聖書は、イスラエル民族を教導するために、イスラエル民族に与えられた神の啓示です。あらゆる民族の中で、神が救い主を送り、救いの働きを完成させる「場」として、また完成された救いを全世界にもたらす祝福の基となるようにと、神が特別にお与えになったのです。イスラエル民族だけが救われるためではなく、彼らを通してすべての民族に「同じ」ように、救いの恵みが行き渡るために、イスラエル民族は選ばれたのです。

そういうわけでイスラエル民族以外の人々、すなわちすべての異邦人は、この啓示の書である律法を与えられてはいません。したがってこの律法によって、異邦人である私たち日本人が裁かれることはないのです。私たち異邦人も罪のために滅びます。でも私たちに与えられたものではない、律法によって裁かれて滅びるのではありません。聖書が語っている通りに、律法なしに滅びるのです。（ローマ２：１２）神の啓示の書である律法を持っていない異邦人は、イスラエル人の様には神に関する知識を持っていません。神のみ心に関する知識もありません。そのためにイスラエル人と同じ裁きを受けることもないのです。

ところが異邦人も、律法を持たないままで律法の要求を満たす場合があります。それはその異邦人自身が自分の律法であり、その心にも律法が記されているからだと、聖書は教えています。（ローマ 2：14～15） すべての人間は、文字で書かれた律法を持っていなくても、心に記された律法を持っているのです。だからその律法が、それぞれの文化や環境の中で良心として芽吹き、それぞれ独自の法律や規範となっているのです。心に記された、文字によらない律法は、異邦人だけに与えられたのではありません。イスラエル人も人間として、同様に心に記された律法を持っています。そしてその上に、文字で書かれた律法が与えられたのです。

心に記された文字によらない律法も、イスラエル人に与えられた文字で書かれた律法も、「同じ」神から出たものなのです。そしてこの心の律法が、年代においても人間としての倫理においても、文字で書かれた律法に先行するのです。心に記された律法は、人間としての基本的な倫理と道徳観と宗教意識を示すものであるのに比べ、文字で書かれた律法は、神の救いの計画と、救いを現実化するために用いられるイスラエル民族の、生き方を示すものでだからです。心に書かれた律法が、文字で書かれた律法を取捨選択するのです。

大切なのは、異邦人である日本人も、この心の律法を持っているという事実です。イスラエル人も、西欧キリスト教諸国の人々も、「同じ」心の律法を持っています。彼らは、心の律法の上に聖書と言う文字で書かれた律法を持っているために、「同じ」心の律法から生じた良心でも、キリスト教的、あるいはイスラエル的に変化した良心を持つことになります。日本人は聖書を持っていませんから、日本文化と日本と言う居住環境の中で育った日本人的な良心を持っています。良心とは、心の律法が文化や環境や教育などの異なった事情の中で芽吹き育ったものです。それぞれの事情の中でかなり異なった様相を帯びることになりますが、その心の奥底にある人間の本質、良心として芽生える前の種は「同じ」なのです。

その心に書かれた律法、良心という芽になって萌え出す種は、神に似せて造られた人間の本性、本質です。すべての人間がこれを持っているのです。すべての人間が「同じ」なのです。この「同じ」から話を始めるのです。すべての人間の心には、濃くも薄くも、神の意識、神のイメージが残っています。それを呼び起こし、明らかにしてあげるのです。よじれていたらゆっくりよじれを直し、皺（しわ）だらけになっていたら、慌てずに時間をかけて引っ張って、その皺を伸ばして上げるのです。日本人の心にもわずかに萌え出ている芽から、そのもとになっている種を、埋もれている宝を掘り当てるかのように、探し出してあげるのです。幸いなことに、日本人の神意識は神道的感覚の中で、かなりはっきりとしていると言えます。また、聖さ、正義、愛、優しさといった神の性質も、だいぶ原型をとどめていると考えられます。それが日本人の倫理や道徳観に現れています。だからこそ日本人には、「同じ」という「鍵の言葉」をしっかりと心に刻んで、それをくり返して思い起こし、思い起こさせながら福音の提示をするのです。

この「同じ」という感覚から萌え出す平等の精神は、どこの民族、どこの宗教、どこの国家よりも優れて、日本人の特徴となっていると思えます。もちろん、悲しいことに、日本人の中にも差別はたくさんあります。しかし、日本人は世界の中で、最も差別を嫌う民族なのです。士農工商という身分さが設けられたり、非民と言われて酷い差別を受けたりした人々もいましたが、人類史と言う大きな流れを観ると明らかです。日本人は最も差別を嫌った民族です。1919年にパリで行われた国際連盟発足の会議で、世界の民族と国家に先駆けて、人種差別撤廃の提案をしたのは日本です。このとき、様々な議論が沸き起こり紆余曲折もありましたが、決を採った結果、１１対５の賛成多数だったにもかかわらず、議長裁定で否決となってしまいました。このとき否決とした議長は、キ

リスト教国を自認していたアメリカの大統領ウイルソンでした。彼はこのような重要な案件は、全会一致でなければならないと主張したのですが、自国が人種差別によってなりたっていた国であったことが、本当の理由でした。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

日本人にお話しするとき、「自分はキリスト教の神を信じています」という言い方はやめましょう。キリスト教の神というと、多くの日本人はフランシスコ・ザビエルの荷物箱に詰めて持ち込まれた、西欧の宗教の神だと考えるのです。良くても、アメリカ人宣教師のスーツケースで運んでこられた、外国の神だと感じて、自分たちのものではないと思うのです。さらに世界史をしっかりと学んでいる人は、キリスト教という宗教が何世紀にもわたる長い間、世界中で犯し続けてきた、人間性にもとる残虐で極悪非道な犯罪を、良く知っているからです。

私たちは、多くの日本人たちにこのようなイメージを持たれている、外国の宗教の神を押し付けるのではなく、昔から日本に居て下さり、日本という国土とその中に住む人々を祝福し、守り、恵み、生かし続けてこられたお方についてお話しするのです。このお方をしっかりと知り、きちっと感謝し、当然の畏敬と信頼を寄せるようにお勧めするのです。私たちクリスチャンが崇め頼っているお方は、かすかではあっても、昔から日本人が心の中で感じ、そっと感謝をし、何かにつけ祀り、崇め畏れて来た相手と「同じ」お方なのです。日本人は大昔から、天地を造り、人間を造り、日本を作り、そこに住む人々を祝福し守り、助けてこられたお方を、良くは分からないまま、説明もつかないまま、ただ素朴に感じて敬って来たのです。

私たち日本のクリスチャンが信頼するようにお勧めするのは、この、昔から日本人が微（かす）かに感じ、密かに崇めて来たお方です。私たちクリスチャンはそのお方について、聖書と言う書物を通してもう少し詳しく知り、ちょっとだけはっきりとした感覚で感謝を捧げ、僅かだけでも明瞭な理解を持って崇め、信頼を強めているだけであって、本来は「同じ」なのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

日本人に伝道するときには、神という言葉をできるだけ使わないようにして、注意深くはじめましょう。できるだけ、「イエス・キリスト」も「十字架」も、「罪」も、「悔い改め」も控えましょう。のっけから、日本人になじみのないキリスト教用語や概念を持ち出して、私たちは「違う」んだと思わせるようなことは止めて、日本人にもわかる自然な言葉、通じる話から始め、「同じ」なんだと安心感を持ってもらうのです。

日本人が昔から心の奥深くに「感じてきた」、大きく強く気高く恵み深いお方、私たちに命を与え、生かし、生きるために必要なものを与えておられるお方について、その名前さえ知らないお方について、畏敬の心を共有しながらお話しして上げましょう。日本人の多くが本能的に「感じている」そのお方こそ、私たちが天地の創造者として礼拝しているお方であると、お話ししましょう。「同じ」を強調するのです。そして「同じ」お方を心に感じている日本人を、尊敬しながら語りましょう。

日本人の多くは、と言うよりほとんどは、たとえ神の存在は否定しても、心の奥深くに感じる、尊い存在、気高い存在、優しく大きく力強く、私たちに命を与え、生かしてくださっている存在を感じてきました。その存在についてあれこれと説明することはできないし、しようとも思いませんが、僅かながらであってもそのような感覚を持ってきました。かすかで消え入りそうな感覚でありながら、決して消えず、拭い去ることも切り捨てることもできないものとして、心の奥深くにあるのです。だからこそ、「自分は神なんてものは信じない」と豪語する人たちも、決して宗教心を否定したり、宗教そのものを軽視したりはしないのです。日本人ほど唯物思想に染まっている人間はいないと言われ、無神論が浸透していると分析されていながら、その実とても宗教的なのです。私たち日本人クリスチャンも、天地を創造されたお方を知って礼拝を始める前は、「同じ」だったはずです

はじめは、「神」という言葉を使わないほうが良いというのは、日本人の多くが、真面目な意味では「神」の存在を否定しているからです。日本語で「神」という場合、どうしても八百万の神々を思い出してしまいます。「かみ」という日本語は、もともと「うえ」という意味で、「神」「守」「頭」「上」などの漢字があてがわれていますが、普通の人間より何らかの意味で強い者、勝れている者を指した言葉です。

ですから力を持って上に立つ殿様は「頭もしくは守＝かみ」であり、権威のあ

る役所は「お上＝おかみ」、宿屋や料亭を仕切るのも「女将＝おかみ」、我が家を仕切るのも「うちのかみさん」です。そして、少しでも料理が上手ければ料理の神、釣りが上手ければ釣りの神、野球が上手いならば野球の神、今年（２０１６年）の流行語大賞は野球でいいプレーをした人を表現して言った「神ってる」でした。日本人は八百万の神々を信じていると言いながら、その実、このような神々は信じていないのです。たとえそのような神々に願いを捧げ、その願いが聞かれたとして、その神々に感謝こそすれ、崇め、礼拝するようなことはごく希にしかないのです。ちょうど盗っ人(と)が何か親切をしてくれた場合は、たとえ相手が盗っ人であると知っていても「ありがとうございます」と言いますが、決して彼を尊敬したり崇めたりはしないのと同じです。

日本の八百万の神々は、どちらかと言うと、聖書の中に登場してくる、悪霊やみ使いに近い存在です。唯一の天地の創造主を教えている聖書も、ある時は「神々」と言う言い方をし、この世の中には人間よりも何かの点で能力の高い存在が、沢山あることを認めています。ですから、日本の八百万の神々の観念も、必ずしもすべてが間違っているのではありません。ただそれらの存在は、天地をお造りになった無限のお方とは、まったく次元の違う小さな存在だということです。創造主と被造物の絶対無限の違いがあるのです。

日本人と真面目に信仰の話をするときには、「神」という言葉がまぎらわしくなります。そのような神々はひとまず横に置いて、話を進めるのが賢いと思われます。「神なんていない」という日本人が現れたら、「そうですよね」と相槌を打って、いまの「かみ＝うえ」のお話をしてあげると良いでしょう。そのうえで、「私は、そのような神々の話をしようとしているのではありません。そうではなく、日本人の多くが、昔から心の中で大切に崇めて来た、名前も知らないし目にも見えないけれど、気高く大きく、優しく恵み深いお方にちがいないと感じ、ひそかに崇めてきた存在について、お話ししたいと願っているのです」と、続けましょう。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

さらに私たちは、日本人も、天地を創造されたお方に似せて造られた、大切な存在であり、このお方の愛の対象だという聖書の教えを、一時も忘れずにお話ししましょう。天地を創造し、ご自分に似せて人間をお造り下さったお方は、それから、ひと時も日本を離れたことがないお方であることを、確認しなおしま

しょう。キリスト教という宗教は西欧から伝えられましたが、その中で教えられている「天地を創造されたお方」は、天地創造のときから現在まで日本に居続けて下さったお方であり、日本人が心で崇めてきたお方なのです。クリスチャンが天地創造の神として崇めているお方と、日本人が良くは分からないし説明もつかないけれど、心で感じ、崇めて来たお方は「同じ」なのです。

日本人の宗教は偶像礼拝であるなどという、一方的な西欧キリスト教の物差しで測った裁きの態度、上から目線の優越感から語ることがないようにしましょう。西欧から来たキリスト教宣教師や、彼らに教えられた日本人クリスチャンたちが、そのような態度を取ったために、多くの日本人たちに嫌われ拒絶されたことははっきりしています。かえって、「私たちも同じお方をあがめているのです」と、つねに「同じ」を強調してお話ししましょう。

日本人も天地の創造主に似せて造られ、創造主に似た霊的な性質を持たされているからこそ、創造主を礼拝したいという宗教心、あるいは宗教的欲求を本能として抱くのです。その宗教本能に語りかけることから、伝道を始めるのです。そして日本人は、あらゆる民族の中でも、最も真面目にその人間の本源的宗教心を守り通し、創造主の聖い性質や美しい善の性質、あるいは愛と恵みという性質を表現してきたのです。

日本は世界でも最も安全な国の一つです。日本は最も人間を大切にする国の一つです。日本は正直が尊重され、犯罪が少なく、勤勉が喜ばれ、自然が愛される国です。もちろん例外はそこここにあります。生活・習慣・文化のなにを採っても、日本よりもすぐれているキリスト教国もあるかもしれません。あってほしいと思います。ただたとえあったとしても、彼らは長い年月聖書を持ち、教会を持ち、キリストを崇めてきた上でその程度なのです。日本は聖書を持たず教会を持たずキリストも信じないままで、今の状態になっているのです。だから日本人は、創造主に似せて造られた人間の元来の性質を、最もよく表現している国民だと言えるのです。ただ普通の日本人は、このようなことに気づかないまま、知らないまま、なんとなく神社に詣でていることでしょう。日本人に、自分たちの宗教心の素晴らしさに気づかせてあげることが、日本人の宣教の第一歩、大切な第一歩です。

日本人の宗教意識の中で、私たちクリスチャンにとって最も大切と思われるのは、その「一神教的性格」です。一般に日本人は八百万の神々を信じていると言われていますが、それは非常に表面的な観察です。浅薄な分析なのです。日本

人の宗教意識を良く観察し分析すると、彼らの感じている尊く大きく強く優しく恵みに富むお方は、一神教に近いというか、聖書が教えている唯一の創造主の感覚に限りなく近いのです。日本にはたくさんの神社があり、多くの神々があると思われていますが、日本人の礼拝する対象は、本当のところ唯一だと判断できるのです。

多くの日本人は、子供のころから神社の境内で遊び、お参りをし、神道的な感覚に親しんできました。神道においてはいちいち個人の信仰などを確かめることはせず、その地域に生まれた子供はすべて氏子と認められます。大変おおらかで、信仰に差別を持ち込まないのです。そして、たとえ名前もいわれも違う多くの神社があり、それらを回りながら参詣したとしても、日本人は、それらの神社の違いに気を使って、違う神がいらっしゃるなどとは考えず、あたかも同じ神がいらっしゃるという感覚で礼拝をします。

日本人は八百万の神々ではなく、むしろ唯一のお方、偏在のお方、（同時にどこにでも居る）良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださるお方を感じているのです。日本人の知的理解はあいまいですが、本能的感覚として、唯一でありながら、同時にどこにでもおられる偏在の神、すなわち聖書が明示しているのと同じ神を認めているのです。このことの意味と意義を、クリスチャンたちがしっかりと理解することが大切です。

そして大変面白いことに、日本人の多くは、どこの神社にも神は存在しないとも思っているのです。存在するのは、いろいろな名前を付けられてそれぞれの神社に祀られている神々ではなく、それらの背後におられる、もっと大きく強く気高く恵み深く、ありがたいお方であると感じています。神社で手を合わせる日本人の多くも、それらの神社で祀られ神々と呼ばれているものを、礼拝しているのだという意識はあまりなく、むしろ、それらの神々の背後にいらっしゃるに違いない偉大なお方、唯一のお方、名前も姿も知らないけれど、いつでもどこにでも居てくださるお方、つまり目に見えず手で触れることができない、偏在のお方として尊び拝んでいるのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

日本人にとって、神社で祀られている神々は、それら自体が実体なのではなく、唯一の大きく強く恵み深く哀れみに富む、目に見えず手で触れることもで

きないお方の存在、あるいは臨在を、より強く感じられるように想定され、祀られたものだと感じています。例えば、天照大御神（あまてらすおおみのかみ）が祀られている神宮に詣でても、太陽を神格化した天照大御神が神であると信じている人も、太陽自体が神であると信じている人もほとんどいません。ただ太陽に感じる大きさ、温かさ恵み深さ、すべてのものに命を与える力などに、畏敬と感謝の心を表しているに過ぎません。本当はその太陽の背後におられるであろう存在、おられるに違いない存在を崇めているのです。仏僧であった西行が伊勢神宮に詣で、そこには天照大御神が祀られていることを百も承知で、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」、と詠ったのは、まさにそのような心なのです。神道の神々は、仏教の仏や神の日本における現れだと理解した本地垂迹（ほんじすいじゃく）によれば、天照大御神は大日如来となるのですが、いずれにしろ非常に日本人的な感覚です。

また神社の境内全体が、目に見えないお方の存在を感じられるように、配慮されて造られています。このお方は自然の中に存在し、自然を通して語り掛けておられると感じるために、多くの場合、神社は自然豊かな中に建てられます。クリスチャンはここで、天地創造のお方が、被造物を通してご自分を現し、ご自分の姿を理解できるようにしておられるという、聖書の教えを思い起こさなければなりません。（ローマ１：19～20）

そのように祀られている神々、あるいは神社を日本語では「依代」（よりしろ）と言います。それ自体は実体ではないけれど、目に見えない実体を表現しているもの、あるいは目に見えない実体がそれを通して自分を現しているものです。目に見えず、手で触れることができない実体が、目に見えるものを通して自分を示し、自分の存在を強く現すのです。日本人は、深山に入って荘厳さを感じ、大木や滝にしめ縄を張ります。海に出ては奇岩にしめ縄をめぐらせます。これは非常に偶像に近いのですが偶像ではありません。依代なのです。実はこの依代こそ、目に見えない天地の創造者が、信仰の弱いイスラエル人に対して、ご自分の臨在を示すためにお用いになった手段でもあるのです。

例えば、荒野で上げられた青銅の蛇を思い出してください。あれは非常に偶像に近いものですが、偶像ではありません。モーセの杖もそうです。幕屋や神殿、聖所や至聖所を考えてみてください。それらは目に見ず手で触れられない、偏在のお方の臨在を示すものですが、偶像ではありません。人間の五感では知覚できない、創造主の臨在を知ることができるように、創造主ご自身が置いてくださった物です。契約の箱とその中に収められた品物も依代です。特に契約

の箱は、触れることができない創造主の臨在を、強烈に示しました。聖書の記述を読み直してください。善意であっても不注意にそれに触れた者は、たちまち滅ぼされてしまったのです。（Ⅱサム 6：6～17） 新約聖書では、主の晩餐が依代にされています。私たちは化体説を信じませんが、単なる象徴であると考えるのも退けるべきです。なぜならこれは、主の臨在を強く示し教える「依代」で、象徴以上のものだからです。私たちは主の十字架の犠牲を思い起こすために聖餐を頂き、聖餐に与るとき主の臨在を強烈に感じるのです。

特筆すべきは、日本の神社にはほとんどの場合、御神体が無いことです。礼拝の対象となるものがないのです。「ご神体」と言う言葉はよく聞きますが、神社には何もないことが多く、あったとしても鏡だったり、米粒だったり、隕石であったり、何かを象徴しているにすぎません。たとえそれらに手を合わせたとしても、日本人はそれらを神としているのではないのです。あくまでも依代なのです。イスラエルの場合は、青銅で作られた蛇や契約の箱の中に収められた三つのものだったりして、かなり具象的です。日本では昔から「三種の神器」と言われるものが存在すると言われていますが、これを代々引き継いでいる天皇さえ、実際にご覧になったことはないということで、実在の方は確かではありません。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

日本人はまた、すべての自然物にこの霊的な存在者が宿っておられると感じています。これは多分に汎神論的な感覚とも言えますが、日本人はむしろ、聖書にも記されている汎神論的な感覚を持っているのだと思われます。聖書の汎神論的性格は、徹底した唯一神がすべてのものに宿っているという、偏在の神の汎神論です。また多神論的な汎神論も、聖書に見られるものです。ただ聖書は神々と言う言葉はほとんど用いずに、悪霊とかみ使いと言う言葉を用いているだけです。日本人の「神」と言う言葉は、唯一絶対の存在者を示すものではなく、犬や猫や蛇やネズミの神々だからです。

いわゆる憑依と言われる現象も、（狐が憑いたとか蛇が憑いたとか言われる）古代の日本では精神病と混同され、たくさん存在したようですが、聖書は同じような現象を、「悪霊に憑かれる」と表現しています。ここではこれらの現象について深入りはしませんが、大切なのは、私たちの創造主が「すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのもののうちに住み、すべてのものをご自分

の内に収めておられるお方であるという、聖書の教えを思い出すことです。(エペソ 4：6、使徒 17：28）そしてこの創造主は、今もすべてのものを支配しておられるという事実に立つことです。

さらに私たちの創造主は被造物、すなわち自然物を通して、ご自分を現し、私たちを教えておられるという、大切な事実を確認しなおしましょう。日本人の中には自然自体を神と考える人がいるほど、自然を大切にします。多くの日本人は自然を神と同一視しないまでも、大自然に囲まれると神秘的な何かを感じ、ありがたくなってその何かを拝みたくなるのです。それは聖書の観点からすると、天地の創造主が自然を通してご自分を現していて下さるからであり、私たちがこの創造主に似せて造られ、このお方を感じられるように造られているからなのです。言い方によれば、自然自体が依代となって創造主の臨在を示しており、創造主は大自然の中におられ、大自然は創造主の内に存在するのです。そして、私たちが熱心に探し求めるならば、創造主である神を見出すことができるように、創造主ご自身が整えてくださったのです。(使徒１７：２７）

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

とは言え、日本人の神道的宗教意識には、個人の信仰という面に、弱さ、あるいは足りなさがあることも理解しなければなりません。そしてそのことを優しく教えてあげるのが大切です。神道的宗教意識では、村や町などの居住共同体の行事が、個人の信仰に代わるものであって、個人の信仰は問われません。祭りを行い神輿（みこし）を担ぎ、行列を作って踊り、歌い、参加すればそれでいいのです。いきおい、神道的な宗教感覚では個人の必要に応える存在が、不在となってしまいます。そこで大衆的な神道というか、俗化した神道感覚では神々の登場となり、お百度参りや修験道に現れてくるのですが、本来の日本の神道感覚では、目に見えず手で触れることもできない大きなお方は、ただただ恵みを持って人間を覆ってくださるだけであって、一人一人の人間のささやかな日常の必要に応えて下さり、一人一人と交わりを持ってくださるお方ではないのです。

これに対して聖書が掲示する天地の創造者は、小さな者、弱い者、虐げられている者、抑圧されている者に、憐みをもって寄り添い、彼らの願いに応えてくださるお方です。確かに旧約聖書は、イスラエルという民族を取り扱っているため、国家、あるいは民族の指導者や王といったものに、焦点が当てられていてい

ますが、それでも、名もない者、弱い者に対する創造主の配慮を、そこここにみることができます。新約聖書に至ると、まさに天地の創造者が１人１人の苦悩する人間、小さく弱い存在に心を配っておられることが、前面に出されるようになっています。このあたりを、反発を招かないような話し方で説明してあげると良いでしょう。小さな者のつまらない悩みにも、細やかな配慮をしてくださる創造者を信じるクリスチャン信仰では、日本人の通俗信仰のような、小さな神々、八百万の神々を必要としないのです。

❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀

日本には仏教の影響が非常に強い地域もあります。そのような背景では、今まで述べてきた神道的な日本人の神意識とは、異なった意識、あるいは宗教感覚があるのではないかと思います。ただ筆者は、たとえ仏教的な感覚を強く抱いている日本人であっても、自分の宗教は仏教だと思っている日本人であっても、実はその宗教感覚の最も深いところ、基盤となっている部分は神道的なものだと理解していますので、神道的感覚について語ってきました。

例えば、日本人独特の「わびさび」の感覚は仏教的なものとして語られますが、筆者はむしろ神道的な日本人の感覚が、日本の仏教の中で姿を現したものと捉えています。色形が不ぞろいな物、壊れかけたように見えるもの、あせてくすんでしまったものなどに、日本人はことさら心を奪われます。そこに落ち着きと親しみと安らぎと調和を見つけ出します。古いお寺や仏像などを訪ねては、「わびさび」の感覚に浸る人たちもいます。でも、仏教寺院も仏像も、もともとは日光の東照宮に観られるように、極彩色に輝いていたものです。「青によし奈良の都は咲く花の・・・」という、奈良の栄華を謳った歌がありますが、これにも、奈良には深緑の色を発する塗料の原料が産出され、寺院などに盛んに塗られたところから、「あおによし」という奈良の発展を表す枕詞となったという説があるほどです。つまり、もともとの仏教建築物は、日本においても、現在の東南アジアで見られるようなけばけばしいものだったのです。

実は仏教の中にも神々が存在します。歴史的な背景はあまり知りませんが、唯物論に近く、神や仏の存在を否定していた原始仏教が、時の変遷につれて仏の存在を認め、さらに、周辺の神々をたくさん取り込むようになりました。それはアニミズムと呼ぶべき感覚です。それで日本に入って来た時の仏教は、日本的な神感覚を容易に取り込むことができたのです。神道的感覚の通俗的な部分、あるいは低度な部分と、仏教の通俗的な部分が容易に結びついたのです。また

日本のおおらかな神道的宗教心も、仏教をとり入れることができ、容易に神仏習合、つまり仏教と神道の混合宗教が成立したのです。ただ神道的感覚の高度な部分、目に見ることも手で触れることもできない普遍的存在に対する感覚は、仏教がもたらした神々にはありません。むしろ阿弥陀仏のなかにそれに近い感覚があるようです。

ともあれ誰に対しても、福音伝達の基本は同じだと思います。相手との違いを見つけ出して、どちらが勝れているかと議論するのではなく、共通点を見出し、共感から話し始めて、自分の信仰について説明すればいいのです。優越感や闘争心から語るのではなく、あくまでも、自分の体験、自分の喜びとして、クリスチャンの信仰について語るのです。

私たちが基本とするのは、「人間」と言う存在について、聖書が教えていることを正しく理解してもらうことです。聖書によると人間は神に似せて造られていて、はじめから、神を感じる霊的な動物として生かされているのです。また神は、自然を通してご自分を現しておられるということです（ローマ 1：19〜20）。そして、人間が真面目にこのお方を追い求めるならば、このお方はご自分を見出すことができるようにしていてくださるということです（使徒 1：18-20）。

それは仏教徒や神道を奉じる人たちを含め、世界中のすべての人間が、創造主を感じる感覚を持っているということであり、創造主は今も自然を通して、かれらにご自分を現しておられるということです。これを、私たちだけが知っている、すべての人間の共通点として意識しながら、「おんなじだ」と語るのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

日本人への伝道のテクニックとして大切なのは、話の初めには「神」という言葉を避けることです。また、「キリスト教の神」も持ちださないことです。「クリスチャンの神」も、「キリスト教」も、日本の伝統文化を重んじる人には禁句です。それらの言葉を聞くと、多くの場合、彼らそれだけで心を閉ざしてしまいます。これまでに宣教師や牧師がとった排他的な態度、日本の宗教や文化習慣に対する高圧的な態度や敵対的な姿勢が、すでに、たくさんの日本人を躓かせて

いるからです。また、世界の歴史に通じている日本人は、すでに述べたように、キリスト教と言う宗教が世界中で犯してきた重大な犯罪を知っているため、良い結果をもたらしません。

大部分の日本人は、「神」を「信じて」いません。　日本人は多神教だと言われ八百万の神々を信じていると言われますが、それは学者から一般人までが安易に陥っている間違にすぎません。日本人の宗教心と、信じるという言葉の意味、それから日本人の言う「神」の意味をきちっと学ばないまま、うわべだけを観て言っているにすぎません。実際、日本人の大部分が神など信じていないと言います。八百万の神々をはじめ、神社や祠に祭られている神々も信じていません。たとえどのようないわれがあり、歴史があり、逸話があっても、また、神社を建て参拝に行くことがあったとしても、それらを信じてはいないのです。

試しに、大きな神社に参拝に来ている多くの日本人に、尋ねてみるといいでしょう。「あなたは、ここに祀られている神を信じておられますか？」 たぶん、いろいろな曖昧な答えが返ってくることでしょう。でも、ほとんどの場合、実際には信じていないということがわかるでしょう。神を信じていると言って神社に参詣していながら、日本人の多くはその神を信じていないのです。本人は信じていると思い込んでいても、実は信じておらず、ばかばかしいとさえ思っているのです。

そういうわけで、日本人が信じていない、ばかばかしい「神」の話はしてはならないのです。それがたとえキリスト教の神でもです。ましてや、キリスト教の神は、「外国から輸入された宗教の神」であり、かつて邪教として禁止されたことのある宗教の神、何百年にもわたって残虐な植民地主義の背骨となってきた、邪悪な宗教の神にすぎません。普通の日本人にとっては、ますます怪しげな、信じるに足りないものです。

❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀

とはいえ、日本人の大部分は、自分の心の奥底にある宗教心を大切にし、宗教の存在を少しばかりの例外を除いては、悪いものとは考えていません。「私は神を信じていませんが、宗教の悪口は言いません」というのが、一般的な意見です。人間は宗教的な動物であり、霊的な感覚を本質として与えられている唯一の動物ですから、自分の本質的感覚に反してものを言う事はできないのです。

八百万の神々や神社に祀られている神々は信じていない多くの日本人も、天地の創造主に似せて造られたものとして、自分に命を与え、生かし、食べ物や着物や住むところを与えていてくださる、大きく、強く、気高く、恵み深く、聖く、善なる存在を、心の奥深くで本能として「感じている」います。ここが大切なところです。

日本人はこのお方のことを心の奥底で感じながらも、このお方のことを深く考えて言葉で説明したり、このお方の姿を想像して絵や像で表現したりはしませんでした。名前を付けるのさえはばかり、神とも異なる、名前のないお方として畏れ敬まってきました。日本人は、自分の心に感じているこの尊いお方を、あまりにも尊いので、触れずさわらず、語らず呼ばず、多くの場合、そっと崇め、感謝をしてきたのです。

時にはこのお方への感謝の表現として祭りを行い、みんなで一緒に歌い、踊り、喜びを表現してきました。でも、そのときでさえ、一人ひとりの信仰を問うようなことはせず、集団として崇めてきたのです。そのために、このお方は日本人の心に、隠れたお方として住んでこられたのです。しかし隠れたお方であるために、しばしば軽んじられてもきたのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

多くの日本人が開国以来、明治政府の方針に反し、キリスト教を西欧の優れた文化の屋台骨であるとみなして、これを受け入れようとしました。でもほとんどは失敗に終わっています。その理由の一つが、キリスト教を運んできた宣教師たちの態度によるものです。

宣教師たちは、ユダヤ人だけに向けて語られた十戒の教え、特に偶像礼拝禁止の律法を、日本人にも直接そのまま適用し、（出２０：１～５）日本人の宗教と宗教心をまったく学ぼうとしないで、一方的に偶像礼拝と決めつけ、罪であると断じて、日本の宗教と日本人の宗教心を卑しめたのです。本当のところ、西欧のキリスト教徒の絶対多数が、自分たちのことを異邦人であるとは感じていません。むしろ自分たちこそ霊的なイスラエル人、本物のイスラエル人であると思っています。イスラエル人と異邦人との区別ができていないのです。その

ために十戒の教えは自分たちに与えられたものであると理解し、そのまま、すべての民族に適用しようとするのです。これが、多くの日本人の心を傷つけることになり、キリスト教とキリスト教の神に躓かせてしまったのです。要するに聖書を良く学んでいない西欧キリスト教の間違いなのです。(異邦人の偶像礼拝の罪はローマ書の一章からかたられるべきです。)

さらに欧米の、特にイギリスとアメリカの宣教師のほとんどは、自分たちのキリスト教文化こそが最も優れた文化であり、この文化を世界中に行き渡らせることこそ、自分たちの国に与えられた神からの使命であると、とんでもない、手前味噌の誤解をしていました。だから行く先々で、ただ宗教だけではなく、それぞれの国や民族の文化や習慣までも、劣ったもの、醜いものとして、ことごとく破壊し取り除こうとしたのです。彼らはそうすることによって、世界中がより優れた文化と習慣を持つ住みやすいところとなると、真面目に信じていました。そのような世界が出来上がったならば、そこにキリストの再臨があると考えていたために、神に対する忠誠心からそのようなことを行ったのです。しかしこれが、多くの国々で反発を招き、宣教を困難にしたのです。特に日本のように、高度に発展した独自の文化を持つ国においては、激しい嫌悪を招くことになったのです。

そんなおかしな信仰を持ってしまったのは、教会の権力の及ぶところが神の国であると考えた、古のカトリック神学に始まりますが、近代の科学の発展が人間社会をより良いものにするという、楽観的ヒューマニズムとキリスト教的征服欲があいまった、プロテスタント主流派の千年期後再臨説がもたらしたものでもありました。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

今や世界は、日本の文化の崇高さに気づいています。日本人の道徳観、倫理観の高さに驚いています。それは日本人が、創造主に似せて造られた人間の本性を、大切にして生きてきたからです。日本には聖書がなく、キリスト教もありませんでした。しかし、日本人の気高さ、日本文化の崇高さは、キリスト教を国教とし、キリスト教の教えで文化を作り上げたという、西欧のどの国にも劣りません。彼らは聖書とキリスト教をもって、あの程度の文化しか持てなかったのです。日本を訪れる欧米宣教師は、まず、自分たちが作り上げた、程度の低いキリスト教を恥じるべきです。

そして、聖書もなくキリスト教も盛んではない日本が、どうしてこれほど高度な文化を築き、穏やかな心を持つ人々を生み出してきたのか、真面目に、真剣に考えるべきです。日本人は、西欧キリスト教文化の人々が無視してきた、造り主であるお方に似せて造られた、人間の本性を大切にしてきたのです。使徒パウロが言う、心に記された律法に忠実だったのです。（ローマ２：１４－１５）

このところ、伝統的なキリスト教諸国では急速なキリスト教離れ、教会離れが続いています。多くの人々が伝統的なキリスト教に失望しています。彼らはキリスト教の中にある人間性に反したもの、すなわち「心に記された律法」、神に似せて造られた人間性に背く多くのものを見また体験して、ひどく失望したのです。文字で書かれた律法を、自分たちに都合よく解釈してきたキリスト教と、その伝統を守り抜こうとする教会よりも、自分の人間性、すなわち「心に記された律法」を大切にし始めたのです。伝統的なキリスト教の教えには、人類に共通すべきものを見出せず、心に記された律法に普遍性を発見したのです。彼らがキリスト教を捨てたときに、残念ながら聖書も一緒に捨ててしまったために、自分たちが大切にする人間性そのものが、実は天地をお造りになったお方から与えられたものであることを知らないのです。

基礎的教え（２）

「信じる」ことではなく「頼る」ことを勧める

私たちは普通「信じる」という言葉を使いますが、信仰の対象に対する態度を表す言葉として、これはかなりあいまいです。「信じる」の代わりに「頼る」、あるいは「信頼する」という、具体的でわかりやすい言葉を用いてみましょう。

「信じる」では、「幽霊の存在を信じるか？」とか、「地球以外の天体に生物が存在すると信じるか？」というのと、同じ意味になってしまいがちです。信じても信じなくても、自分た

ちの現実の生活にはおおよそ関わりなく、興味本位の話、あるいは荒唐無稽な話に終わってしまいます。

それに比べて、「頼る」あるいは「信頼する」は実際の生活に直接関係し、多くの場合は人間関係に用いられます。幼子が母親を信頼する、夫婦が互いに頼り合うという具合です。天地を創造されたお方を信じても、信じなくても、あまり人生に関りがありません。ところが「信頼する」となると話は別です。「頼る」となるといよいよ意味が明白です。

私たちが勧めるのは信じることではなく、頼ることです。「信仰」という言葉にも、「信じ仰ぐ」という美しい意味がありますが、「信仰を持つ」ことを勧めたり、「信仰する」ように励ましたりすると、聖書が教える意味から離れてぼやけてしまいます。やはり、「頼る」という言葉が最も明瞭です。私たちは天地をお造りになったお方を、荒唐無稽な話として信じるように勧めるのではなく、ちょうど幼子が母親を頼るように、「頼る」ことを勧めるのです。夫が妻を信頼し、妻が夫を頼りにするように、このお方を信頼し、頼って生きるように励ますのです。

この広大で緻密な天地をお造りになった無限のお方、力においても知識においても限りのないお方、できないことは一つもなく、知らないことも何もないお方に頼って、信頼して、毎日を送るのです。空を飛ぶ小鳥がこのお方に養われ、野に咲く花がこのお方に装ってもらい、明日のことを思い煩わずに生きています。私たち人間は、空の鳥や野の花よりも勝れた者です。天と地をお造りになったお方は、私たちを愛しておられるのですから、このお方が守ってくださることに信頼して、あれこれ思い煩わずに生きるのです。たとえ空を飛ぶ小鳥が地に落ち、花が萎んでしまうことがあっても、このお方の全能のみ手の中での出来事です。私たちは、このお方の手からこぼれ落ちることはないのです。イエス様が教えられた通りです。

私たちは、日本人が昔から心の奥底で感じ信じてきたお方が、この頼りがいのある、天地を創造されたお方であると信じ、信頼して、思い煩いから解放されて生きています。

そういうわけで、「神様を信じましょう」という表現も、「キリストを信じましょう」という言い方も、私たちの伝道の言葉としては使わないようにしましょう。「天と地を造り、私たちを造り、私たちを愛し、私たちを守って下さっているお方を信頼しましょう」と言いましょう。イエス・キリストのことを充分説明した後ならば、いま生きて私たちを助けてくださる、キリストの愛と力に頼りましょう」と勧めてあげましょう。

基礎的教え（２）の説明

多くの日本人がキリスト教の神を信じたいと思い、信じようと努力しましたが、とうとう信じられないで終わっています。有名人だけを数えても相当な数に上ります。彼らの間違いは、「信じたい、信じたい」と願ったことです。そこには神は荒唐無稽な存在だという、認識が前提としてあるのです。その上、信じるために知ろうとしたことです。彼らは初めから、信じられないものを無理に信じるような気持ちで、信じたいと願い、信じられるように知ろうとしているのです。大切なのは信じることではなく、頼ることです。

神を知ることなど不可能です。人間の知能はあまりにも小さく、無限の神を知的にはかり知ろうとすることは、愚の骨頂です。海の水を杯（さかずき）で量ろうとするようなものです。結局、彼らは、考えても考えても理解できず、理解できないために信じることもできなかったのです。信じるための前提を理解に置いたからです。

彼らは無限の神の存在を、一所懸命に知的に信じようとしたのです。それはちょうど、東京湾には体長２０センチメートルの、世界で一番小さなクジラが生息しているという、荒唐無稽な物語を信じようと努力するのと同じ感覚でした。知的にも、理性的にも無理なことです。聖書が教える「信じる」という心の行為は、そのような知的な行為ではなく、むしろ情緒的で、感情的な行為だからです。物や事柄に信頼するということとも違って、心を持った存在、人格を持った存在を頼るという意味なのです。

それは幼子が母親を頼って生きる姿に通じます。幼子は、母親がはたして信頼に足りる人間かどうか、調べてみようなどとは思いません。母親の本当の姿を知ってしまっては、母親を信頼できなくなることもありますが、幸いなことに、幼子は母親を理解しようなどとは試みず、まず信頼するのです。また、人間同士でも、相手のことを完全に理解することなどあり得ません。小さな人間でさえも、完全に理解するには大き過ぎるのです。ましてや無限の神を理解する

ことなど、初めから無理なのです。確かに天地を造られたお方を正しく理解すればするほど、信頼度は上がります。母親とは違います。でも、この無限のお方を正しく理解することなど不可能であり、理解しようとすることが間違いであり、理解したと思うことはさらに間違いです。キリスト教の神を信じるために、理解しようと努力した多くの日本人には気の毒ですが、しょせん無理なことをしたのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

だから、知的には絶対に把握しきれない無限のお方を、知ろうなどと考えさせないことです。信じようとなどさせないことです。でも、信頼すること、頼ることはできます。信頼すると、つまり、頼るならば、天地を創造され私たちを造ってくださったお方は、その信頼に応えてくださるのです。信頼に応えられると、そこにさらに強い信頼関係が出来上がるのです。私たちは、日本人に信じることではなく、頼ることを勧めてあげましょう。

まず頼って、頼ってくる者にお応え下さるお方を、体験してもらうのです。そこに生まれる信頼関係こそ、信仰と呼ばれるものなのです。信頼関係ができると、人と人との間でもうれしくなります。それだけで幸せになります。ましてや、天と地をお造りになったお方との信頼関係が出来上がると、私たちの生活は安心と喜びに満ちたものと変わります。恐れや心配がずっと少なくなるのです。毎日、心が平安になり、満足感でいっぱいになり、感謝にあふれて暮らすことができるようになります。そうすると神を体験的に知ることになるのです。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

信じるというと、ただ心の動きで終わってしまいがちです。ところが、頼ることはもっと行動的です。信頼することも心の動きだけではなく、実際の行為を前提とします。クリスチャンの信仰は行為を伴うものです。私たちの人間生活は、互いに信頼し合うことによって成り立ちます。神を信じることは、単なる理念とか、信念とか、教理の受容とかではなく、神と呼ばれる存在との信頼関係に入ることなのです。そのお方を頼って生き、そのお方に信用されて暮らすことなのです。

聖書の翻訳が「信仰」と「信じる」となっていることが、私たちの伝道の妨げになっています。もしも、「信頼」と「頼る」となっていたら・・・・日本語の美しさはともかくとして、正しい理解の助けになっていたことでしょう。実際、主イエスの教えにしても聖書全体の教えからしても、信頼すること、頼ることが強調されているのです。

信頼とはお付き合いです。お付き合いは体験です。良いお付き合いが続き深くなると、体験が重なりより強い信頼関係となります。クリスチャン生活は、天地をお造りになったお方に信頼し、このお方に頼り、このお方に任せて生きることです。すべての物事がこのお方の支配下にあると認めて、あくせくしないで生きることです。どんなにつらいことがあり、不利なことが起こっても、必ず、このお方が正しく裁き、最善にしてくださると信頼して、ずる賢くではなく、正直に正しく生きようとすることです。それが主イエスの教えの真髄です。そのような生き方に、天地をお造りになったお方は、祝福と守りをもってお応えくださるのです。それを体験することが大切なのです。

聖書を読んだことがない人がほとんどで、キリスト教の知識もない日本人ですから、聖書の教えを守り、教会の教えに従って生きるように勧めることなどできません。この時点で、教会に誘ったり聖書を読むことを勧めたりするのはまだ早すぎます。ここで思い出すべきことは、日本人には、天地をお造りになったお方に似せて造られた人間の本源的な姿が、まだまだ破壊し尽くされずに残っているという事実です。つまり、心に記された神の律法が消去されないままに、留まっているということです。ですから、日本人には「自分の心に記されている律法」によって生きることを、お勧めするのが良いでしょう。「心の声」に従いましょうという言い方が、分かってもらえると思います。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

ここまでお話ししてもまだ、「知らないものを信じるなんて不可能だ」と言い張る人も多いことでしょう。そんな人には、「失礼ですが、結婚をしていらっしゃいますか？」と尋ねてみましょう。そこから次のような説明をするのが良いでしょう。まだ結婚をしていない人でも、この結婚の話で説明するとわかりやすいと思います。

「結婚する前に、相手の方の何もかも、すべてを知ってから結婚されたのですか？　たぶん、違うと思いますがいかがですか？　何もかもしっかりと知ってからでないと結婚できないなどと言い出すと、結婚は、まず不可能になってしまいます。すでに説明したように、人間のような小さな存在でも、そのすべてを知るなど不可能だからです。結婚して 30 年も経ってから、ますます相手のことが分からなくなるなどと言うこともしばしばです。大抵の場合は・・・・特に若いうちは、相手のことを知るとか理解するとかいう前に、心が燃えてしまって『何にも知らないまま、』『何が何でも』結婚してしまうのです。少し理性が発達する年頃になっても、何も分かっていないと分かった上で、『ええい！ままよ！！』と、清水の舞台から飛び降りるような気持ちで、結婚するのです。」

「結婚するとは、信頼関係に入ることです。互いに何も知らない者同士が、信頼し合うという前提で、信じ合うという不文律でまず結婚してしまい、それから小さな失敗と大きな失敗をくり返しながら、互いに知り合い、もっと深く理解し合い、付き合いを重ね、信頼を深め、結婚と言う信頼関係を築き上げるのです」と、まあ、このような説明すれば大抵の人は納得してくれます。「人間ですから、その間、信頼がまったく失われ、離婚に至ることもあるでしょう。でも神が私たちへの信頼を失ってしまうことはありませんし、神が私たちの信頼を裏切ることもないのです。神はあらかじめ、私たちが信頼のおけない弱く小さな人間であることを、充分にご存知の上で私たちの信頼を受け止めてくださるのです。そこが人間と違うところです。ところが多くの人間は、まるで 40 歳、50 歳を過ぎてから、損得すべてを計算してから結婚しようとする人のように、何もかも知ろうとするために、信じるという決断ができないのです。ですから少なくても、結婚している人は、理解不可能な神を信じることができるはずです。」

❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀　❀

ここ 30 年近く、日本は経済的にかなり苦戦しています。1970 年代から 1990 年代の始めまで持っていた自信を、日本人は失いかけています。ところが日本人は、別の意味で自信を取り戻しつつあるのです。それは道徳的なあるいは倫理的な自信です。自分の国の文化に対する自信とも言えそうです。

倫理的観点から見て、あるいは文化という側面から計って、日本は世界の国々より劣ってはいなかったし、いまも劣っていない。キリスト教国と言われる諸国の歴史と現代の実情に照らし合わせても、日本は決して劣っていないばかり

か、むしろ勝れているということに、多くの日本人が気付き始めています。

キリスト教を信奉していた西欧の白人諸国が、大航海時代、植民地主義時代、帝国主義時代にわたって戦争に明け暮れ、侵略と搾取と抑圧と殺戮に血眼になっていたとき、日本は徳川幕府によって戦争のない 250 年間を過ごしていました。そのために日本は、戦争に必要な大きな技術や工業には後れを取りましたが、人を思いやる平和な営みとそのための学問、文学、技能、美術、演劇などの分野では、他に類を見ない発展を遂げました。これがどんなに「すごいこと」であったかというようなことにも、平均的な日本人が気づき始め、自分たちの国を改めて評価しているのです。これまでのように、鎖国のために欧米に後れを取った愚かな日本というような、一辺倒な見方ではなくなってきたのです。

確かに日本は、植民地主義の西欧諸国によって開国を迫られ、その力に屈したかのように見えました。しかし、何とか植民地になる憂き目からは逃れて独立国家となり、西欧諸国に追いつき追い越すために富国強兵を旗印にして邁進しました。現代の民主主義的感覚や人権を重んじる倫理からすると、様々な足りなさがあることは事実ですが、当時の国際感覚を勘定に入れても、このときの日本の選択は、まさに見事というほかはありません。偶然も重なったとはいえ、日本人の精神性の高さが根底にあります。

いま私たちは、情報システムと交通の発展に助けられて、まさに国際的感覚をもって、より客観的に自分たちを見ることができるようになっています。秘密にされ、また誤解されていた歴史的な国際問題も、主に、アメリカ政府の情報開示などに助けられて、かなり明らかになってきています。戦後ずっと担い続けてきた「戦争犯罪国家日本」という精神的負い目が、実は大部分、戦勝国アメリカによって故意にねじ曲げられた、歴史教育の洗脳によるものだということが、このところずいぶん明らかになってきています。

現在でも、戦勝国であり戦後の実質的な日本の統治国であったアメリカの、日本を戦争犯罪者国家にでっちあげる歴史洗脳教育を信じている人が、多数派を占めているかもしれません。しかし、いわゆる「War Guilt Information Program」と言うアメリカ政府の中枢で作られ、マッカーサーによって日本で実施された洗脳教育のことを知り、自分多たちが騙されて来たことを知る人が増えてきているのも事実です。そのようなことを知らなくても、多くの日本人はベトナム戦争を境として、アメリカを始めとする西欧白人諸国の偽善と欺瞞に満ちた戦争犯罪を、数多く知るようになったのです。今世紀に入ってからはそ

の傾向がますます強くなっています。つい最近は、長い間左翼系の主要メディアとして、ねつ造された日本軍の戦争犯罪をいくつも報じ続けてきた朝日新聞が、とうとう慰安婦問題で詫びを入れたことは良く知られています。（詫びを入れたのは日本語でだけで、英語ではやっていません。つまり日本人に対してだけであり、世界の人々をだまし続けたことに詫びを入れていません）これらをもって、日本国民が右翼に傾き始めたと論じる向きもありますが、むしろ、自分たちの倫理的高さを再認識していると言ったほうが良いように思います。

戦後しばらく日本人が持ち続けた、アメリカの民主主義、平等、人権などへの憧憬が、ベトナム戦争とそれに続多くの紛争で、アメリカの本当の態度を知ることによって、消滅してしまったのです。アメリカが敗戦国日本に対して行ってくれた、多くの人道主義的な善行を高く評価したとしても、アメリカもほかの国々と同じように利己主義で偽善的だということが、白日の下に晒されるようになってきたのです。戦後のアメリカが日本に行った人道主義的行いの数々は、確かに民主主義に支えられた、アメリカ人の良心の現れでもあったのですが、アメリカ政府の本心は、第一に、自らが行った戦争犯罪を自国民の目から隠し通すためであり、第二に、日本を犯罪国家に貶（おとし）めるためでした。日本人がいつまでも戦争を始めた罪悪感と、戦争に敗れた羞恥心を抱き続けて、二度と再び、アメリカをはじめとする白人国際社会の優位性に武力をもって、挑まなくするためだったのです。

簡単に言えば、白人社会では有色人種の日本人が、白人と同じ能力を発揮し力を持ち、自分たちと肩を並べることが許せなかったのです。そういう意味では、イタリアもドイツも連合軍の敵国であり、日本との同盟国でしたが、彼らは白人であったという点で、異なった感覚で取り扱われたのです。例えば、東京裁判で唯一の有色人種裁判官であったインドのパール判事は、この裁判自体が茶番劇であり、法律を無視して日本を判事国家に仕上げるためのものであることを見破り、判事を止めています。白人キリスト教国イギリスの植民地国であったインドは、イギリスの犯罪を見続けてきたために、このような形で日本を裁くことに、彼の正義感が赦さなかったのです。東京裁判で日本と日本人を攻め続けたイギリスもオランダも、それぞれ日本軍によって独立を得たマレーシアやインドネシアに戻って、植民地化を再現しようと戦争を始めています。

ところが肝心の日本では、いまだに国民の多くが東京裁判は正当であったと、思い込んでいます。アメリカでは、裁判に関わった多くの判事や弁護士たちがその不当性を明らかにしています。そのような戦勝国による裁判を行うこと自

体が、犯罪であったと断言する歴史家も少なくないのです。日本は律儀にも戦後 70 年間、戦争犯罪国家の烙印を負い続けてきました。これからも、日本人の多くがそうすることに賛成し続けることでしょう。戦争犯罪国家であったという作り話を、事実と認めてしまっているのです。

憲法第９条をナイーブに持ち続ける日本人は、他の多くの国の人々とは異なって、戦争そのものを犯罪と理解し、何はともあれ、日本は戦争をしたのであるから戦争犯罪国家なのだと感じ、（国際法では戦争が犯罪であるとはされていません）その汚名を濯ごうなどとはしないのです。戦争を犯罪と認め、自分たちがそれを犯したと認めることは、すばらしいことです。各地で行われた日本軍の犯罪が、まったくの捏造であったと言うつもりもありません。しかし同時に、敗戦国日本を裁き、戦争犯罪国家と烙印を押した国々が、日本よりもずっと大きな戦争犯罪を重ねていた、しかも数百年にわたって継続していたという、事実も知るようになったのです。

明治以降の日本の歴史にはたくさんの観方があって、統一見解と言うものを得るのは不可能です。ただ最近は多くの日本人が、日本人であることに誇りを持ち始めていることは、確かです。いくつかの調査によると、もう一度生まれ変わることができるなら、自分の国に生まれてきたいと答えた日本人は 90 パーセントを超え、世界で最も高率だったということです。自分の国に満足しているかということでは、日本人はまだ満足してはおりません。また、外国人による日本の評価もまだまだ低いのは事実です。一度造り上げられた「戦争犯罪国家日本」のイメージは、簡単には消え去らないのです。烙印は消えないのです。しかし、日本人は自分の国を認め、日本人であることに誇りを持ち始めているのも、紛れもない事実です。聖書も持たない、キリスト教国でもない日本に、多くの日本人は納得し、日本人であることに誇りと自信を持ちつつあり、そのような日本を認め始めている国々も多くなっているのです。

そのような今の日本人に、聖書の高潔さ、キリスト教の崇高さを説こうとしても無駄に終わることでしょう。キリスト教はそんなに立派ではないからです。そのため、聖書までも見下されているのです。しかし、日本人が昔から心の奥深くで感じてきた、日本人の宗教感覚や倫理性から説き進めるならば、関心をもって聞いてもらえることが多くなり、聖書が教えている天地の創造者を理解し、受け入れてくれる日本人も少なくないはずです。聖書が教える天地の創造者は、日本人の宗教観にとてもよく合うのです。

明治以降の日本は、残虐な西欧植民地主義諸国家が奉じていたキリスト教を受け入れずに、知識や技術のみを取り入れました。キリスト教の代わりに、日本は国家神道を精神的支柱として建て、天皇制を築いて和魂洋才のスローガンを打ち立てたのです。この国家の選択は、歴史的に見て非常に優れたものであった、少なくても倫理的に見て秀でたものであったと言えます。もしもこの時点で、キリスト教を精神的支柱として取り入れていたならば、その後、西欧諸国の植民地主義に倣って台湾を取り、韓国を併合し、満州に進出し、中国と戦い、一時的とは言え太平洋の島国や東南アジアの国々を支配下に置いた日本は、西欧キリスト教諸国に倣って、残虐非道植民地政策をやっていた可能性が大きいからです。

ただし、このあたりの歴史的な認識、あるいは理解は、同じ日本人でも、立場によってずいぶん異なっています。アメリカをはじめとする連合国（現在の国連）が描き上げた、日本を戦争犯罪国家とするための歴史観を、いまだに信じている左寄りの人たちがいる一方、右翼やそれに近い人たちは、以前から日本の犯罪性を軽く見がちです。愛国主義的な感情が、排他主義となり、有色人別紙に繋がっているからです。

どちらの見方がより真実に近いか、議論が沸騰中であることを理解しながらも、いま日本人の中に見られる明白な傾向は、左寄りの人たちの激減です。その理由の最も大きなものの一つが、現在明らかになりつつあるアメリカや連合国、つまり、伝統的キリスト教国の白人たちの犯罪性です。今や、満州事変から太平洋戦争に至るまでの間の、アメリカをはじめとした西欧キリスト教諸国の、白人の犯罪性が暴露され続けているのです。日本を自虐史観に陥れた、朝日新聞などの左寄りメディアの偽善性が、白日に晒されているだけでなく、日米開戦や戦後の日本統治に関するアメリカ政府の機密文書が、戦後 70 年以上たった今はすでに開示され、少しずつ、より確実な学びができるようになっているからです。

今、世界の歴史と自分たちの国日本が通って来た道を、より公平に振り返ることができるようになった日本人が、キリスト教にあこがれを持つことは少なくなりました。野蛮な植民地主義国家の宗教であったキリスト教は、もはや尊敬できる宗教ではないのです。キリスト教の神は、日本人にとって「受け入れるべきでも信じるべきでもない神」となっているのです。太平洋戦争の後数十年は民主主義の国、人権の国、平等の国、自由の国、キリスト教の国として、多くの日本人に尊敬されていたアメリカは、もはやその尊敬を失ってしまいました。

特に昨年の大統領選挙の醜さと滑稽さは、（トランプとクリントン）尊敬の対象であったアメリカを嘲笑と揶揄と軽蔑の対象にしてしまったのです。それはそのまま、彼らが告白するキリスト教に対する、白けた感覚に結び付いてしまいます。

（太平洋戦争の経緯は、どうやら、戦後私たちが受け続けてきた歴史の学びとは、相当かけ離れたものだったようです。ドイツとイタリアを敵として苦戦していたヨーロッパの連合国から、戦線に加わってほしいと催促されていた、時のアメリカ大統領ルーズベルトは、どうしてもそれに応じることができませんでした。彼が大統選挙運動中に、ヨーロッパ戦線には加わらないと公約していたことと、当時のアメリカ国民の 80 パーセントが、ヨーロッパの戦争に巻き込まれることに反対していたからです。それでルーズベルトは、ドイツとイタリアと連盟を結んでいた日本と戦争を始めれば、しかも日本に、非常に卑怯だと思われる方法で戦争を始めさせることができれば、アメリカ国民の義憤を呼び起こし、日本とだけではなく、ヨーロッパの戦争にも加わることができると考えて、経済封鎖をはじめとしたあらゆる方法で日本を挑発し、アメリカを攻撃させようとしたのです。

日本軍の無線交信が傍聴され、暗号が解読されていることすら知らなかった日本は、真珠湾の奇襲をもってアメリカとの戦争を始めました。ルーズベルトはほくそ笑んだことでしょう。真珠湾とその入り口に旧式の戦艦を集め、日本の奇襲が成功するように、わざわざお膳立てさえしています。日本からの宣戦布告が、奇襲前に彼に届いたかどうかという議論が、専門家と言われる人々の間ではよくされていますが、どちらにしてもルーズベルトは知った上で、待ち構えていたのです。このことはフィリピンに居たマッカーサーにも知らされていたのですが、当のハワイの司令官には知らされていませんでした。卑怯な黄色人種日本人に対するアメリカ国民の怒りをより大きくするため、自国の兵士たちの命を犠牲にしたのです。《筆者がこの話をはじめて聞いたのは 1974 年、フィリピンの神学校で学んでいたときでした。歴史を専攻していたアメリカ人宣教師が、「ここに日本人の学生がいるようだが・・・・。　・・・アメリカでもまだごくわずかの歴史家たちしか知らないこと・・・」と前置きして、わざわざ授業とは関わりのない話をしてくださったのです。朝日新聞の申し子みたいだった当時の筆者には、まさに信じられない驚くべき話でした。》

開戦当時のアメリカは、今よりもっともっと悪い人種差別の国でした。人権は白人に限って認められていたのです。ルーズベルト自身、非常に強い人種差

別主義者でした。ピューリタンによって始められた国であるにも拘わらず、アメリカでは数百万人の先住民が騙され、土地を奪われ、殺されています。福沢諭吉に真似られた、ジェファーソン大統領の有名な人権宣言も、すべての人間の平等を謳ったものではなく、白人だけに限られた人権を認めるだけでした。数百万の黒人奴隷が牛馬のごとく働かせられ、一切の人権を認められず、痛められ虐げられ殺されて行きました。試しに、ネットで「Strange fruit」と検索してみてください。たったの一例ですが、いかに残酷なことが行われていたか、知ることができます。アメリカで黒人の人権が認められたのは 1966 年、それが執行されたのは 1969 年のことです。

言い方によれば、日本が戦ったロシアとの戦いも、清国との戦いも、大東亜戦争も、太平洋戦争も、白人支配に対する有色人種の戦いでもあったのです。日本は太平洋戦争では負けましたが、有色人種を白人支配から解放するという点ではかなり成功したのです。東南アジア諸国は戦後すべて白人諸国から独立したからです。インドネシアやマレーシアなどは、残留日本兵が独立を支援してたたきました。この独立の機運アフリカなどの諸国に広がったのです。残念ながら、白人支配はまだまだ形を変えて続いていますが、植民地が解放されたのは事実です。

ともあれルーズベルトの作戦は見事に成功しました。真珠湾奇襲を受けたアメリカ国民は、義憤を爆発させて日本との戦争を正当化し、ヨーロッパ戦線にも大義をもって加わることができたのです。ところがこれは、単にアメリカ人の義憤を呼び起し、ついには日本に勝利させただけではすみませんでした。アメリカは、ルーズベルトの後を継いだ大統領も、もちろん、アメリカの大義を引き継がなければなりませんでした。アメリカ国民を欺き続けるには、日本を戦争犯罪国家に仕立てなければならなかったのです。太平洋戦争は、あるいはその前の大東亜戦争から、何から何まですべてのすべて卑怯な日本のために、行われたのだとしなければならなかったわけです。「War Guilt Information Program」が立てられ、実施されたのです。

彼らは急いで日本国憲法を作成し、第９条をもって戦争を放棄させ、さらに東京裁判などの不当な裁判で、多くの戦争犯罪者を作り上げて死刑にし、日本が戦争犯罪者国家であることを強く意識させ、自分たちの犯罪性を完全に隠し通してきたのです。そこには、放送や新聞を始めとした出版、さらに 20 万人の公職追放をおこない、教育の分野に自分たちに都合の良い人々を入れ、彼らの筋書きに沿った、歴史教育をさせることも含まれていました。このとき、それま

では抑圧されてきた多くの左翼系の人々が教師となり、日教組が力を持つようになって、いわゆる「平和教育」という名の偏向教育が盛んとなったのです。（ゾルゲ事件などで有名な、共産主義の国際組織コミュンテルンの暗躍の影響もありました。戦争当時は盛んに戦意を鼓舞していた朝日新聞を始めとする多くの新聞も、GHQ の言いなりになって 180 度の方向転換を行ったまま今に至っています。）

このような歴史がいよいよ明らかになり、アメリカに対する憧憬が色あせ、日本人であることの誇りを取り戻している現代の日本人に、もう、「素晴らしいキリスト教」の作り話で伝道することは偽りであり、不可能なのです。それにも拘わらず、私たちは聖書が告げている救いの恵みと尊さ、神の力の偉大さを語り続けなければならないのです。

基礎的教え（３）

「理解する」ではなく、「感じる」を大切にする

頼ることは「理解」することではありません。「理解すること」を前に置くと頼ることができなくなります。ちっぽけで有限の人間の脳みそが、無限のお方を理解することはできません。ただ「感じる」だけです。天地創造のお方に似せて造られた人間は、心で、本能的にそのお方を「感じる」ように造られているからです。だから日本人の宗教感覚では、心の奥深くで感じるお方については、良くわからなくてもよい、無理に説明しなくてもよい、感じるままにして置けばよいと悟っているのです。なにもかも説明しようとする西欧の神学などには、かえってうさん臭さを覚えるのです。私たちはその日本人の、宗教感覚に語り掛け

るのです。

天と地をお造りになった無限のお方を、知的に理解しようとするのは、大海の水を杯で測ろうとするより、愚かで冒涜的なことだとすでにお話ししました。私たちは、人間の頭脳の容量が、大海の前の杯よりもはるかに小さなものであることを、しっかりと認めた上で話をしなければなりません。信じるために知ろうという、愚かな欲求を受け入れてはなりません。つまり、教えようとしてはならないのです。私たちはついつい、天地の創造者について知っていることを教えようとしますが、その誘惑に落ちてはなりません。知的には、極めて基本的なことを知らせるだけで良いのです。教えなければならないのは、頼ることの大切さです。

「頼ること」の大部分は心の問題で、知的な事柄として取り扱うことではありません。信頼することは、理解することと同じではありません。確かに正確な知識は信頼の増加を助けますが、知らなくても頼ることができます。理解していなくても信頼することはできます。信仰の問題を知的なことがらとし、哲学と混同してはいけません。信仰は本来、親子関係と同じで、心が通った信頼関係なのです。

幼子は、母親のことをまだ何にも知らなくても、本能的に信頼します。信頼されると、大抵の母親の愛情は増幅し、信頼に応え、幼子を守ろうとします。そこでまた、幼子の信頼が強まるのです。幼子が、母親のことを理解しなければ、頼ることができないとしたら悲劇です。それでは、いつまでたっても母子の信頼関係は生まれません。すでに説明したように、結婚もまた同じです。相手のことを１００パーセント理解して結婚することなど、ありま得ません。少ししか知らなくても、心が先に動いてしまって、「ままよっ」と結婚の決意をするのです。つまり、情緒によって、心によって信頼関係に入ろうとするのです。それは「直観」と言われたり、「ピンときた」と表現されたり、「突然悟った」などとも語られています。悟りなどと言うと、知的理解であるかのように思われがちですが、実際は極めて情緒的な現象です。

天地を創造されたお方は、知的に理解されることよりも、頼られることをとても喜んでくださいます。頼られると、その信頼を裏切りたくないと思われるのです。「窮鳥懐に入れば猟師もこれを撃たず」という諺がありますが、まさにその通りです。猟師に狙われた鳥が逃げ場を失って、こともあろうに猟師の懐に逃げ込んでしまったら、さすがの漁師もこれを殺すことはないのです。人間は信頼されると守ってやりたいと思うのです。この信頼されることを喜ぶ気持ちこそ、創造者に似せて造られた人間の、本来の姿の現れです。

人間の能力で神を理解することはできません。ですから、理解させようとすることが愚かな試みだと、しっかり確認しておきましょう。その一方で、人間には神を感じる心、本能的

感覚、宗教心というものが、はじめから備わっていることを、しっかりと認めましょう。わたしたち日本人は、特にその感覚が勝れているのです。だからそこから話を進めるのです。

　理解させようとすると必ず失望します。理解させようとする者が理解していないのですから、当然です。しかし信仰を心の問題とし、頼ることであることを教えると、多くの場合、いわゆる、目を開かれる体験、目から鱗の体験をすることになるのです。理解ではなく、悟りです。知的探求で悟りに入る人はいません。それは心の問題なのです。

基礎的教え（３）の説明

基礎的教え　４

「感じる」から「体験」へ

　私たち日本人の大多数は、「神」は信じていないとしても、心の最も深いとこ

ろで、神より大きく、尊く、気高く、恵み深く、哀れみに富み、正しく、公平なお方を感じ、密かにこのお方を大切にしています。たとえ微（かす）かであってもそのお方を感じ、その感覚を「日本的なもの」として大切にしているのです。だからこそ、日本の社会構造が変わり、生活様式が変わっても、まだ、祭りを行い、神輿を担ぎ、参拝をし、踊りを踊り続けているのです。私たちはこの日本人の感覚を尊び、その感覚を伝道の糸口とすべきなのです。その感覚を積極的に評価し、そこから、天地創造のお方についてお話しするのです。

　日本人が何となく感じているこの感覚を、もう少し明確にしてあげるのです。自分の信仰の証として、天地をお造りになったお方についてお話しし、日本人があまり期待しないで祈り、お願いしていることを、もっと期待しながら祈り願うことを勧めてあげるのです。この場合お話しするのはあくまでも聖書の教え、聖書に記されている教えです。ただしここではまだ聖書を持ち出さずに、聖書の教えを伝えましょう。

　日本人は神社に詣でても、あまり熱心には祈りません。そのような個人的な信仰は、持っていないのです。願掛けをしても、多くの場合は熱心ではありません。日本人の基本的な信仰観では、神社では礼拝し、感謝を捧げるのであって、お願

い事をするのではありません。畏れ多いお方に、かんたんに願い事などしてはならないのです。通俗的な信仰では、結構願い事をしているのは事実ですが、それも、信仰をもって祈っているとは言えません。どちらかと言うと、「念じている」とでもいうべきで、観念論的なのです。また、神社信仰は個人の信仰よりも、村とか町などの、地域共同体としての祀りを大切にする信仰です。したがって、個人的祈りには力が入らないのです。

　そこで、天地を造り人間をお造り下さったお方は、人間一人ひとりを愛しておられること、一人ひとりの人間が幸せに生きることを望み、そのために太陽を昇らせ、雨を降らせ、作物を実らせ、生き物を生かしていて下さるお方であることをお話しし、私たち小さな人間の祈りや願いにも、答えてくださるお方であることをお話ししてあげるのです。野の花、空の鳥、市場で売られている雀、あるいは迷子の羊、さらには寡婦、乞食など、イエス様の物語には小さな者に対する思いやりがあふれています。

　ここで大切なのは、実際にこのお方に頼り、お祈りをするように勧めることです。私たちは知識を伝えるのではなく、信頼することを勧めるのです。今まではよくわからないお方に、よくわからないまま祈願をしていたかもしれませんが、

これからは、天地を造り、私たちを造り、私たちの幸せを願っておられ、私たちの祈りにお応え下さるお方に頼って、お祈りするように励ましてあげるのです。

天地をお造りになったお方は、クリスチャンの祈りだけを聞き入れてくださるわけではありません。はっきりと「天地をお造りになったお方に申し上げます」と、祈る対象をはっきりさせて呼びかけて、信頼して祈るならば聞いてくださるお方なのです。それが、天と地をお造りになった方のみ心にかなった祈りならば、必ず聞いていただけるのです。クリスチャンではない人の祈りは聞かれないと思ってはなりません。神はご自分を探し求める者には、ご自分を現してくださるのです。

肝心なことは、「自分は、天と地と人間をお造りになった大きなお方に守られている、と日本人が感じることです。また、祈りが聞き入れられていると感じることです。その信仰の体験、信頼の体験こそが、クリスチャン信仰への第一歩です。こうして、日本人的な曖昧な信仰から、わずかでも信仰の対象者をはっきりさせる信仰へ進み、この大きな恵み深いお方を日々感じながら、信頼して生きるように勧めるのです。すると、天地を造られたお方は日本人の信頼にお応え下さり、平安と満たされた気持ちを与えてくださいます。その体験が重要なのです。

基礎的教え　５

本当の罪の自覚と悔い改めへ

「罪、罪」と、日本人にわからない話をしてはなりません。罪と犯罪は違います。天地の創造者についての明確な理解のない日本人に、罪を教えることは困難です。クリスチャンでさえ、正しい罪の理解を持っていないことが多いのです。まず、天地の創造者の存在と、その恵みとを体験してもらうことが先です。天地の創造者の存在がわかり、その恵みと祝福と守りを体験するならば、罪についての本当の理解、罪の自覚は案外簡単なのです。

日本には「義理」という言葉があります。お世話になった人に、きちっとお礼をし、感謝の気持ちを何らかの形で表わさなければ、義理を欠き、不義理をすることになります。ここでは何か悪いことをしたというより、するべきことをしなかったということが、強調されます。

もしも私たちが天と地の創造者の恵みを体験し、生かされている喜びを実感するならば、当然、それに対して感謝の表現をすべきだと感じるようになります。そして、いままで充分な、また当然の感謝をしてこなかった、感謝の表現と行いを曖昧にしてきたことへの、心の疼（うず）き、義理を欠いた、不義理を重ねてきたという気持ちが湧き上がります。これが、天地をお造りになった方への罪意識です。

あるいは「親不孝」という言葉があります。親の恩は山よりも高いと言われてきました。ところが親の心を子は知らずとも言われます。「親思ふ　心にまさる親心　けふのおとずれ　何ときくらん」と、幕府に首をはねられるとき、この辞世の句を詠んだのは吉田松陰だったでしょうか。親の恩を忘れるのは恥知らずです。だとすると、天地をお造りになった大きなお方の大恩を忘れるのは、もっと恥知らずなことです。

聖書が教える人間の罪とは、天地の造り主であり、あらゆる善いもので人間を恵んでくださっているお方に、義理を欠くことです。目には見えないままで私たちを祝福し、お守り下さっているお方の大きな恩を、忘れてしまっていることで

す。そしてこのお方のお心に反した生活をしていることです。このお方の人間に対するお心は、人間がこのお方を崇め、人間同士が互いに愛し合うことです。

　人間が天地をお造りになり、人間をご自分に似せてお造りになったお方の大恩を忘れ、義理を欠き、恩知らずとなって、このお方のお心を無視して生きていることが罪なのです。大切なことは、この不義理、この恩知らずを悔いて、お詫びをすることです。そして、これからは、このお方に心からの感謝を表して行くことです。そして、このお方のお心を大切にした生き方をすることです。つまり、このお方を敬い、人を愛する生活をしようとこころがけることです。これが本当の罪の自覚と悔い改めです。

　まず、このお方にお詫びの祈りを捧げるように、励ましてあげましょう。そしてお詫びのお祈りを、導いてあげましょう。その上で、「これからはお心に沿った生き方を心がけますので、弱い私をお助け下さい」と、お願いするように勧めるのです。人間を愛しておられるお方は、必ずその祈りを受け入れ、お応えくださるのです。

基礎的教え　6

できるようにしてくださるお方

自分の不義理、または恩知らずな生き方に気づいて、悔い改めの祈りをし、人間としての正しい生き方をしようと心がけると、それができるようになるのです。これはまさに不思議なことです。いままで幾度も心がけていながら、することができなかった正しい生き方が、ここで可能になるのです。それはその人本人の意思の力でも、励ますクリスチャンの能力によるのでもありません。天地をお造りになったお方が、悔い改めた人間に新しい力を与えて下さり、できるようにしてくださるのです。

多くのクリスチャンは、早くから罪を教え、直ちにキリストの贖いのみ業を教え、キリストを救い主として受け入れるようにと進みますが、これは日本人には理解できないやり方です。たとえ日本人が、キリストの十字架の働きを知らなくても、その働きをさせてくださった天地の造り主は、ご存じなのです。日本人の贖いは、とうの昔に済んでいるのです。日本人の贖いを、日本人が知らないうち

に済ませてくださった、天地の造り主に信頼して福音を語るのです。

　福音は、アブラハムが信じたように信じるならば、救われるということです。アブラハムはキリストも十字架も贖いも、悔い改めでさえも知りませんでした。しかし、「神」、すなわち日本人が心の奥に感じてきた、尊いお方を信じたときに救われたのです。聖書ではアブラハムが神を信じたのは、あたかも、自分に子が与えられると言われたときのように記述されていますが、聖書をさらによく読むと、アブラハムはもっともっと前から、神を信じていました。彼がいつの時点で神を信じたのかは、不明なのです。どの時点での信仰を、救われるにふさわしいと神が認めてくださったか、私たちには不明です。ただその信仰が、子が与えられると言われた時点で、私たちにもわかるように確認されただけの話です。

　私たちがキリストの十字架の贖いを理解して、キリストを信じるということを強調しすぎると、日本人にはわからなくなるのです。ですから、ここではすべてをご存知のお方に信頼して、まず、天地の創造者に「頼ること」を前面に出して、話を進めるのです。天地の造り主が私たちのためにしてくださったことを、たとえ私たちが知的に理解することができなくても、私たちの救いには関係のないことです。天地の造り主が成し遂げてくださった大きなことを、私たちが理

解することこそ不可能なのです。だからこそ、救いは信仰による、すなわち頼る心、信頼によるのであって、知的理解と言う行い、業によるのではないのです。私たちが頼るときに、このお方は、必ずお応えくださいます。その応えを体験してもらうことこそが重要な点です。

　くり返しますが、重要なのは福音を理解させることではありません。天地をお造りになったお方に頼る心を起こさせることです。頼ったならば、その信頼に天地をお造りになったお方がお応えくださるのです。すると、今まで幾度も試して失敗した、より良い生き方ができるようになるのです。それは、甦りのキリストの力を受けて、新しい命に生きるようにしていただけるからです。より良い生き方は、いちいち説明する必要もありません。ほとんどは、天地をお造りになったお方に似せて造られた人間の本能として、日本人はかなりしっかりと知っているからです。短くまとめると、神を敬い、人を愛することです。

基礎的教え　7

なぜ赦されるのか？

ここで、大概の日本人は尋ねることでしょう。「天地をお造りになった大きなお方は、どうして私のような小さな者に心を留め、不義理と不孝の罪を簡単なお詫びの祈りで、赦してくださるのでしょう？」 もしも、このような質問をしないまま、長く時間がたつようならば、こちら側から、そのような質問をしないではおれないように仕向ければよいことです。

ここで初めて、神の贖いの愛、大きな深い愛について説明ができます。造り主が贖い主でもあることをお話しできるのです。すでに、造り主の愛と恵みについては知っているはずですし、感謝もしています。また、赦しを願う祈りもし、このお方の力もある程度体験しているはずです。信頼が出来上がっているのです。ですから、み子キリストの十字架の話も、案外、容易に受け入れてもらえます。あまりにも内容が深く、理解はできなくても、出来上がっている信頼によって、受け入れてもらえるのです。

「父なる神と子なる神キリスト」と言う理解困難な真実も、すでに、天地の創造者は人間の理解を超越したお方であるということを確認していますので、容易に受け入れることができます。キリストの十字架の働きを受け入れると、天地

をお造りになったお方の愛が、さらにはっきりと分かるようになり、もっともっと強い感謝の気持ちに満たされます。十字架の物語を、よくわからない疑わしい話ではなく、感動的な愛の物語として聞くことができます。自分と言う一人の日本人に対する創造者の愛が伝わるのです。

キリストの十字架の贖いを早いうちに持ち出さないことによって、時間がかかると思われるかもしれませんが、ほとんどの日本人には、かえって、このほうが近道です。話しているうちに、「天地をお造りになったお方」という言い方が回りくどくて、「神様」と言いたくなったら、それでもかまいません。「天と地をお造りになったお方を言い表す、適当な日本語がなかったため『神』と翻訳されていますので、私たちもとりあえず『神』と呼びましょう」と説明すればよいことです。

私たちは神を神として崇めず、感謝もせず、神のみ思いを無視して自分の欲得のために、他人を傷つけながら生きてきました。それが罪なのです。しかもその罪があまりにも大きいために、私たちは正しい神に刑罰を受けて滅ぼされるのが当然でした。たとえ人間の世界では良くできた人、立派な生き方をした人と言われても、まったく聖いお方の前に出ると、罪だらけです。すべての人間は、そ

れぞれの行いに対して当然の報いを受けるために、死んで後に裁かれるのです。そのように聖書にも教えられていますし、多くの人間がほとんど本能的に、そのように感じて恐れているのです。

　でも、人間を愛し、人間が幸せに生きることを何よりも望んでおられるお方は、この人間が裁かれ、罪のために滅びゆくのを見るのが忍びなく、何とかしてこの人間を救おうとしてくださいました。それが、ご自分の独り子と呼ばれるキリストの、十字架の上での身代わりの死でした。罪のない神の子キリストが、すべての人間の罪の刑罰を背負い、身代わりとなって十字架で死んできださったのです。人間をお造りになったお方は、人間に対する愛のあまり、人間を滅ぼしてしまうのを望まず、身代わりにご自分の独り子キリストを、最も厳しい死刑をもって罰し、人間を赦してくださることにしたのです。

　だから人間は誰でも、このお方に信頼しその愛にすがりさえすれば、救われるのです。救われるということは、神の厳しい刑罰から逃れられるということだけではありません。今までの、天地をお造りになった大きなお方と私たちの関係は、何となく感じ、何となく感謝を捧げ、何となく恵みに浴してきたという、いわば薄い関係、浅い関係、遠い関係でした。ところがキリストの十字架の意味を知り、

これを感謝して受け入れると、愛をもって私たちをお造り下さっただけでなく、キリストの犠牲を払ってまでも愛し続けてくださったお方として理解し、感動をもって近くににじり寄ることができる関係になるのです。甘えて懐に飛び込むことができ、なんでも話しかけることができ、なんでもお願いすることができ、いつでも守っていただいていると実感できる、親しい関係になるのです。

**　私たちが赦されるのは、私たち人間が何か良いことをしたからではなく、ただただ、天地の創造者であるお方が、一方的に、私たちを愛で、そのため赦しの道を準備してくださったからです。私たちが赦されて救われるのは、このお方が準備してくださったキリストの身代わりの死のおかげです。このお方の大きな愛に信頼しておすがりすれば、このお方はだれでも救ってくださるのです。**

　さらに、私たちがキリストの十字架で救われるということは、永遠の命を頂くということ。神道には、死生観が欠けている。
仏教でもはなはだ不明瞭。キリストは明確。日本人は神道的感覚で大いなるお方への憧憬と畏れの気持ちを持つが、死後のせかいは仏教と言う宗教の教えを持って埋め合わせをする。ただしそれも不充分。

基礎的教え　８

実際に祈ることを勧める

すでに前の課で、おりに触れ、祈ることを勧めてきましたが、改めて、実際に祈ることを勧める大切さに触れましょう。祈らないままだと、単なる「教え」や「感じ」に終わってしまいます。祈ることによって、頼る、信頼するという心の行為が口で表現され、祈る人の確認となります。そしてさらに大切なことは、天地をお造りになったお方、人間をお造りになったお方、日本人が心の奥で密かに感じて来たお方が、実際に自分の祈りに応えてくださるお方として、現れてくださるということです。

ですから、祈り方を知らない人たちには、祈りを導いてあげることも大いに有効です。そして、「イエス・キリストのお名前を通して祈ります」という祈りと、その意味も教えて上げるのが良いでしょう。いま甦って天に上り、大祭司として私たちの祈りをとりなしていてくださるイエス様、罪は犯さなかったけれど人となり、人としてのあらゆる辛苦を体験し、祈る一人一人の心を深く理解してとりなしてくださるイエス様について、説明してあげるのもいいでしょう。

祈りには、いくつかの段階をつけて指導して上げてください。

１．　造られた感謝、命を与えられた感謝、生かされている感謝、必要を与え

られている感謝など、日本人として心に感じていながら、しっかりと感謝をしてこなかった事柄に対して、改めて、はっきりと感謝を捧げさせましょう。月、星、太陽、私たちが生かされている地球、海、山、川、森、林、湖、陸上動物、海中動物、木に咲く花々、野の草花、見る物触れるものすべてに感謝するのです。さらに、美しい自然を美しいと感じる感性、美味しいものを美味しいと感じる味覚、心地よい風を感じる感覚にも感謝を忘れないように、教えてあげることです。素晴らしい自然の中に生かされていることを、感謝の祈りで実感させてあげるのです。

2．　忍耐深く、私たちの無知による不義理、不孝を許してくださっていたことへの感謝を、改めてはっきりと捧げましょう。それと同時に、これからは、天地をお造りになったお方のお喜びになる生き方をしますと、約束の祈りを致しましょう。このお方のお喜びになる生き方は、このお方を崇め感謝を捧げながら、人々を愛し人々の役に立つ生き方をすることです。

　またそのような生き方は、自分の力だけでは不可能ですので、「どうかあなた様の力によって、あなた様がお喜びになるような生き方を、させてくださいますようにお助けください」と、祈るように導きましょう。

3．　私たちの不義理、不孝の罪を許し見逃して来てくださっただけでなく、完全にまた永遠に赦されるように、イエス・キリストによる身代わりの死という、準備まで整えてくださったことを、心から感謝するようにしっかりと、確実に導きましょう。私たちの不義理、不孝の罪、人を愛することを忘れ自分勝手な生き方をしてきた罪が、キリストの十字架の原因となったことを、改めてお詫びするように導いてあげましょう。

　またそれだけで終わらず、私たちの将来には死が待ち受けているのではなく、永遠の命が待ち受けているという、贖いの福音を喜んで受け入れ、その事実に基づいて生きて行きますと、信頼の告白をさせてあげましょう。

4．　私たちの日常は、まだまだ嵐の毎日になることでしょう。それがイエス・キリストの教えです。しかし、天地をお造りになったお方が私たちの味方です。怖がる必要はありません。どのような時にも、共に居てくださるこの大きなお方をいつも感じながら、勇気をもってこのお方がお喜びになる生き方ができるように、毎日、祈りながら生活しましょうと、励ましてあげましょう。

このような祈りを続けることによって、あなたがお話ししている相手は、かな

らず、しっかりとした神体験を持ち、クリスチャンとして確実な成長を遂げていくことになるのです。